## 平成２４年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
## 中学校の部　最優秀賞

# 「発展途上国を救え」

福島大学附属中学校　３年　桑折 知里

エチオピアのチグレ州にあるメカレでは、大勢の人に涙で迎えられて赤ちゃんが誕生する。日本人であるあなたなら、このことについてどう感じるだろう。おそらく、「この子は幸せ者だ。」そのように感じる人がほとんどではないだろうか。現に私も、そのうちの一人だった。しかし、この涙の本当の理由は違うのだ。エチオピアでは、「こんなに辛く、苦しい世の中になぜ生まれてくるのだ。」と、この先の赤ちゃんの哀れな行く末を思い、泣くのだという。本来は歓迎されて生まれ、その国の未来を担うはずの子供が、こんな悲しい生まれ方でよいはずがない。私はこう考える。子供たちが歓迎されて生まれてくることのできるような国をつくるために、他の国の人々の手を借りてでも平和に暮らせる国をつくっていくべきではないかと。発展途上国の現状改善なしに、健全な国際社会の構築はありえないと。

今年の２月、私は一つの団体の存在を知った。国境なき医師団、通称ＭＳＦだ。私の担任の先生からの「国境なき医師団には興味はないか。」という一言が、私の心を動かすきっかけとなった。

１９６７年、ナイジェリアで独立を宣言したビアフラ地方とナイジェリア政府による内戦が始まった。戦争中、ナイジェリアは深刻な食糧不足によって、約２００万人が命を落とすという悲惨な状況だった。多くの医師たちはこの内戦の間、ひとつでも多くの命を助けるために奮闘したが、数々の制約によって助けられたはずの命も助けることができなかった。「もっと効果的な援助がしたい。」そんな医師たちの思いで、１９７１年にＭＳＦは誕生した。ＭＳＦこそ、国際社会においての医療の原点であると私は考える。発展途上国の数々の内戦の現場で活動してきたＭＳＦだからこそ救える命があるのだ。

犠牲になるのは兵士だけではない。幼い子供も無差別に命を落とす。それが戦争だ。今も未来も歴史の中から消すことのできない人間の大きな過ちだ。こんな醜い戦争が頻発していれば、エチオピアの家族のように、生まれてきた子供に対して悲観的になるのも無理はない。アフリカにある発展途上の国では満足な医療はおろか、食糧、きれいな水を得るのも容易ではなく、そんな環境で生活しているがために５歳まで生きられない子どもが多くいるのである。

私の妹は、今年の６月で６歳を迎えた。内戦もない、冷蔵庫をのぞけば食料があり、水道をひねりさえすれば、浄水されて安心安全な水が流れる日本に生きている妹は、もちろ

ん大きな病気をしたことなどもない。しかし、自分たちが今日も生きていられることに感謝し、同時に発展途上国の現状も知る。これが国際社会に生きる私たちの責務であり、支援への第一歩だ。

シエラレオネ。この国はほんの１０年前までの１１年間、激しい内戦に苦しめられた国である。私は、自分が生まれてからも世界で戦争が起きていたことにとても驚いた。日本が終戦した１９４５年が、世界の終戦だと認識していた部分があったのだ。しかし、シエラレオネでは、日本が日々の発展を続けていたその時も、国内避難民が国中にあふれていた。シエラレオネ政府の予算は底を尽き、子供は栄養失調で全身浮腫になっている。国の経済も国民生活もボロボロになっていたこの国に救いの手を伸ばしたのもＭＳＦだった。

「言葉が常に命を救えるわけではありませんが、沈黙は確かに人を殺すことができます。」この言葉は１９９９年にＭＳＦがノーベル平和賞を受賞したときのジェームズ・オルビンスキー氏のスピーチである。困っている人々のＳＯＳに応えること。そんなひたむきな活動によって救われた国はどれだけあっただろう。もちろん、シエラレオネも例外ではない。

現地に住む人々の生活は、日本人である私たちには想像もつかないような粗末な環境の上に成り立っているものだった。粗末というのは失礼ではないか。そう思う人もいるだろう。しかし、あなたは排泄をした後に左手で自分のお尻を洗う、そんなことができるだろうか。ましてや、その手も洗わずに右手で食事をする。これが現地の人にとっては当たり前のことで、ひとつの文化なのだ。また、現地で医療スタッフとされている人も、実は資格も持たず、義務教育すら受けていない人ばかりである。そんな人たちに、あなたは自分の命を預けることができるだろうか。ＭＳＦは、それらを見事に変えてみせた。排泄後の石けんでの手洗いの徹底、医療スタッフの教育。最初２５パーセントだった入院患者の死亡率は、半年で５％まで下がった。国の文化を尊重しつつ、国を改善していく。地道な努力で困難を乗り越え、ＭＳＦはシエラレオネに未来をつないだ。

ＭＳＦを通して、私は発展途上国の子供たちの現状を知った。そして、国際社会のあり方についても考えるきっかけとなった。医療とは、みんなが平和に暮らせる国際社会を築く上で重要な礎となる。発展途上国では、十分な医療技術がないために平均寿命は、日本人の３分の１にしか満たない。そのため、生産年齢人口は少なく、本来なら学校教育を受けるべき子供が学校にも行けず、家族のために、その日１日を生きるために、今日も身を粉にして働いている。

世界地図のパズルを思い浮かべてほしい。ひとつの国はひとつのピースでしかない。しかし、そのひとつのピースがなければ、パズルは完成できない。本当の意味での国際社会を築くことができないのだ。国力の大小にかかわらず、互いに協調していくことこそが、平和な国際社会を築くための第一歩である。私は、いつかお互いの国が助け合っていけるような国際社会になることを信じている。そして、私は必ず救命救急医になって、医療技術の進歩に貢献していくことを、ここで誓いたい。